

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：32103

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2021

課題番号：18H06397・19K21476

研究課題名(和文) 自閉症スペクトラム障害を有する思春期の子どものレジリエンス・モデルの構築

研究課題名(英文) Components of Resilience in Upper-Grade Elementary School Students with Autism Spectrum Disorders

研究代表者

海野 潔美 (umino, kiyomi)

常磐大学・看護学部・助教

研究者番号：80824242

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：ASDと診断され普通学校に通学している小学5年生に、自分の癖や特性をどのように受け止めてきたか、生活する中でうまくいかず困っている事とその対処方法、将来の楽しみと不安について面接法で調査を行った。
結果、ASDの子どものレジリエンスの構成要素は、「I AM要因」として【好きなこと】【自分の性格】【苦手だけれど好きになったこと】【これから頑張りたいこと】、「I CAN」要因として、【得意なこと】【頑張っていること】、「I HAVE」要因として、【友達存在】【友達との関係性】【こまったときの対処方法】【将来の夢】であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小学校高学年のASDの子供のレジリエンスの要素を明確化したことにより、協力者においては、自己全体に対して向けられる評価については理解が進んでおり、他者との違いや自己の良い点にも十分気付きを得られており、情緒発達において年齢相当の発達過程にいる事がわかった。また、ASDの子どもは、苦手な事、出来ない事がある自分をありのまま受け入れつつある状態であったが、他者と違って今の自分がそれでよいといった自己尊重までは行っていないかった。そのため、自己理解を促すようなかわりが必要であり、レジリエンスの構成要素より、子供の問題行動に着目するのではなく、強みに着目し肯定的な介入が重要であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The study participants are fifth-grade elementary school students who were diagnosed with ASD and who attend a regular school. In the interview, they were asked to describe how they recognized their own habits and characteristics, what problems they faced in their daily lives and how they deal with them, and what they expected and worried about regarding the future. The interview data was analyzed qualitatively by creating a literal record from the data, which was encoded.

The components of resilience this study found in children with ASD were, "favorite things," "his/her own personality," "things he/she is not good at but comes to like," and "things he/she wants to work harder at" in the "I am" category; "things he/she is good at" and "things he/she is struggling with" in the "I can" category; and "the presence of friends," "relationships with friends" "actions taken to deal with problems," and "future dreams" in the "I have" category.

研究分野：発達障害 小児看護

キーワード：自閉症スペクトラム障害 レジリエンス 思春期

1. 研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム障害 (以下 ASD と略す) とは「人とのコミュニケーションが苦手なだけで済む」といった自閉症の特性を持つ状態を総称したもの¹⁾を指し発達期に問題が顕在化する発達障害に位置付けられている。ASD の子どもは、対人関係やコミュニケーションの取り方などで特性があるため、年齢相応に期待される活動や、社会の習慣や常識に合わせて生活することが難しく、対人関係や集団生活において、つまずきを感じる人が多い¹⁾。また、ASD の特性は、小児期のみではなく、何らかの形で一生続くものであることが、指摘されている²⁾。文部科学省による平成 28 年度特別支援教育に関する調査では、公立小中学校において注意欠陥多動性障害、情緒障害、学習障害、自閉症などで、通級により指導を受けている子どもの数は過去 3 年間で 17.4% 増加しており、ASD の特性を持つ子どもの割合も増加傾向である。

思春期は一般的に 10 歳から 17 ~ 18 歳を示すことが多いとされており³⁾ 学童期後半より青年期前半までを指すこととなる。特に小学校高学年では就学後学校など集団で関わる場面において、友達と自分との違いを認識し始める時期である。そのため、ASD の子どもは、定型発達の子どもの抱える思春期特有の心理的混乱と葛藤にくわえ、ASD の特性や他者とは違う自分と向き合うことが必要となる。さらに定型発達の子どものマイナスの部分が ASD の子どもでは顕著に表面化した状態になっており¹⁾ より一層自己肯定感や自尊心の低下を招きやすいと考えられる。特に ASD の子どもにおいてはその困りごとが ASD の特性に起因していることが多く³⁾ 根本的な解決はむずかしい現状がある。

人には個々に持っている強さがあり、その力は、その人自身の特性や工夫、家族や周囲の人の支えによって、守られ引き出される。また、その無意識的に発揮している力を意識化することは、今後立ち向かう困難から、子ども自身が立ち直る力となると考える。足りないことやできなかったことを指摘するのではなく、今まで活用してきた自己の立ち直る力に着目し、子どもの体験にしっかりと耳を傾け、子どもの持っている力、すなわちレジリエンスを見出だすことが重要であると考えられる。

レジリエンスとは、心の回復力と訳され、心の「強さ」というより「しなやかさ」を指し、つまり「心のしなやかさを生かした立ち直る力」のことである⁴⁾。Grothberg (1995) は、レジリエンスを「困難な状況に際しても、その困難に向き合い克服し、成長に導く能力」⁵⁾として重要であるとし、レジリエンスの 3 要素⁶⁾として、「I AM 要因 (自己尊重や希望、信念)」、「I HAVE 要因 (信頼関係やロールモデルの存在)」、「I CAN 要因 (問題解決や信頼関係を構築する力)」を提言している。知的障害を伴わない ASD の子どもはこれから自己の特性とうまく付き合い、社会に適応していくことが望める子ども達であり、自分の特性を理解し、うまく対処していくためには、思春期におけるレジリエンス向上への支援が重要となる。

2. 研究の目的

本研究では、思春期の中でもその入り口にある、学童期後半における ASD の子どものレジリエンス構成要素を本人の語りより明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン：半構成的面接を用いた質的帰納的研究

(2) 研究対象：ASD と診断されている普通学校に通学 (情緒支援学級の通級を含む) している小学 5 年生とした。ただし、特別支援学校に通学している場合や知的障害 (WISC で全知能 70 以下) がある場合は除外した。

(3) データ収集方法：小児神経専門外来を有する 2 医療機関へ協力依頼し、同意を得た。ポスター掲示を行ったが、公募で集まらなかったため、協力施設の小児神経医師より候補者を推薦いただき協力依頼を文書で行った。協力の意志がある場合は、母親より直接研究者に連絡してもらい、再度口頭にて説明を行い、同意を得た。

(4) 調査内容：ASD の子どもの面接内容は自分の癖や特性をどのように受け止めてきたか、生活する中でうまくいかず困っていることとその対処方法、将来の楽しみと不安についてであった。

(5) 分析方法：面接データより逐語録を作成し Grothberg のレジリエンスの 3 要素に関連した内容についてコード化、カテゴリー化を行い質的に分析した。

(6) 倫理的配慮：母親には研究協力が、子どもの身体面、精神面において負担とならないかを事前に判断いただき、その上で、研究の主旨、参加協力、中断、拒否は自由意思である事、協力しない場合においても治療や看護に影響が生じないこと、個人情報の保護など徹底することについて、子どもと母親に対し文書と口頭で説明し、両者の同意を得てから実施した。なお、本研究は、常磐大学倫理委員会の承認 (100092) を得て行った。

4. 研究成果

(1) 協力者の基本属性

ASD の子どもの平均年齢 10.4 歳の 5 名であり、すべて男子であった。うち 3 名は注意欠

如・多動症（以下 ADHD と略す）の合併が見られた。家族構成は、核家族が2組、拡大家族が3組で、きょうだいがいる家庭が3組であった。病名の告知を受けているのが2名であり、すべての協力者が特別支援学級に通級していた。

(2) ASD の子どもの面接結果

平均面接時間は、14分48秒（7分55秒～18分20秒）であった。子どもの語りから、Grothberg のレジリエンスの3要素について、60のコード、36のサブカテゴリー、10のカテゴリーが抽出され、それらのカテゴリーの内容から、「I AM 要因」、「I HAVE 要因」、「I CAN 要因」のコアカテゴリーに集約した。以下コアカテゴリーごとに詳細を説明する。

本研究においては、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは , 協力者から語られた言葉は斜体で示した。

(3) 「I AM 要因」について

「I AM 要因」として【好きなこと】【自分の性格】【苦手だけど好きになったこと】【これから頑張りたいこと】の4カテゴリーが抽出された。

【好きなこと】

協力者は、鉛筆で細かい絵を書くこと や、バドミントン、持久走、体育など 体を動かすこと が好きであった。

【自分の性格】

協力者は自分の性格を頑張り屋さんで 一生懸命に物事に取り組む 姿勢を持っていること、明るく、面白いといった 外交的でムードメーカー 的存在であること、優しく 思いやりがある ことなど肯定的な表現をしていた。一方でじゃまされるとすぐに怒ってしまうといった 気性が激しい 面も自分の性格として表現していた。

【苦手だけど好きになったこと】

協力者は、算数 は苦手だが一生懸命勉強してたら好きになり、自転車 も乗るのは苦手だが、意外に好きであった。

【これから頑張りたいこと】

協力者は、苦手である 運動 と自己の特性である 気性が激しい ことを認識しており、そのために イライラしないこと をこれから頑張りたいとおもっていた。

(4) 「I CAN」要因について

「I CAN」要因として【得意なこと】【頑張っていること】の2カテゴリーが抽出された。

【得意なこと】

協力者は、卓球や縄跳びなどの 運動 や鉛筆で細かい 絵を書くこと、段ボールで 武器を創ること を得意としていた。また、対人関係においては 外国人教師と緊張せずに 接すること ができること、変なことを言って 友達を笑わせること などを得意としていた。

【頑張っていること】

協力者は、自分の不得意でありやりたくはないが頑張っていることとして 勉強 を挙げていた。また、フットサルなどの 運動 も頑張っていた。家庭での役割として、弟のおむつを替えたり面倒をみることや買い物の時重い荷物を運ぶことなどの お母さんのお手伝いをする ことを頑張っていた。そして自己の特性を理解して 自分の心を落ち着かせることと、そのために 毎日薬を飲むこと を頑張っていた。

(5) 「I HAVE」要因について

「I HAVE」要因として、【友達との存在】【友達との関係性】【こまったときの対処方法】【将来の夢】の4カテゴリーが抽出された。

【友達との存在】

協力者には学校に50人から数えきれないくらいの友達が 男女問わずたくさんいる。

【友達との関係性】

協力者は、保育園の時から 幼馴染の関係 の友達がおり、友達とゲームの話をする ことや昼休みに遊ぶことなどを楽しんでいる 遊びを通しての関係を構築していた。友達とは、鉛筆で細かい絵を書くなど 自分の得意なことをほめてくれる関係 であり、けんかやもめごとのない関係 を構築していた。

【こまったときの対処方法】

協力者は、困難なことが立ちのぼったときの自己完結の対処方法として、2~3回 深呼吸をする こと、あきらめて 我慢する ことをしていた。また気分転換としてゲームや将棋、友達と遊ぶなど 好きなことをする ことや 寝る ことで記憶や体験をリセット していた。

物理的な距離をとるため、祖母の家など 別な場所に行く ことをしていた。友達との関係性においては真正面より立ち向かい友達にいろいろ言われると段ボールの武器を創って 戦いに行く ことをしていた。協力者は、困ったとき、先生や友達、祖母など 誰かに相談する ことをしていたが、一方で家族に相談すると怒られてしまう、家族は自分の性格を知っているから困ったときには 相談しない という方法をとっていた。

【将来の夢】

協力者は将来の夢として、おじいちゃん家の田んぼでコメ作りをしたい、お父さんとお母さんと一緒にゴルフコースを回りたい、お父さんのような会社員になりたいなど ロールモデルとなる家族の存在 があってこそその夢を語っていた。また、ゲームかアニメの声優になり

たい、ゲーム実況の YouTuber になりたいなど ロールモデルとなる第3者の存在 により
あこがれを抱いたり、ドクターヘリに乗った救命救急士やトラック・バス・電車の運転手な
ど 職業としてのあこがれ を抱いたりし、将来の夢としていた。

(6) 要素ごとの考察

「I AM (自己尊重や希望、信念) 要因」

Grotberg は、レジリエンスの構成要素に内部因子として自己尊重すなわち自尊心を内包している。自尊心とは自分の価値を認め自分を大切に感じる感情である。学童期後半は、自我が確立し、協力者においても他者との違いを認識し始める時期であるといえる。本研究において、【自分の性格】では他者を思いやる気持ちや友好性が抽出され、これは Grotberg の「自分や他の人のことを尊重すること」や「他者を思いやること」、「友好的であること」に該当すると考えられる。また Grotberg は「穏やかで良い性格であること」を挙げている。木谷ら⁶⁾は ASD 者の自己理解を促進させるためのライフステージごとの課題として、小学校時代は診断告知と自己の身体感覚への気づきを挙げている。協力者は、気性が激しい といったネガティブな自己とも協力者は向き合い、これからイライラしないように頑張りたいとしていた。このような情同調整すなわち感情のコントロールは、レジリエンスを構成する中核的な要素である⁷⁾。よって、協力者の行動は、レジリエンスの高い状態であったと考えられる。さらに【苦手だけど好きになったこと】では、協力者は苦手という結果を受け入れ、そこから楽しさを見出すことができていた。協力者は不完全な自分を受け入れ、現状の自分における価値を見出していたと考えられる。

Grotberg は「未来の計画を立てること」を挙げており、これは【これから頑張りたいこと】に該当すると考えられる。単に目標を設定するだけでなくそれらの目標の達成を妨げる可能性のある逆境に対処する準備がされていることも含めてレジリエンスの高い状態であるとしている。しかし、協力者においては自身の経験より克服したいという意味はくみ取れたが、それらを成し遂げるための具体的な方策や逆境への対処については抽出されなかった。これはこの時期の子どもにおいては自己認知が未熟であり⁶⁾、自己の発達特性とまだ折り合いが十分に付けられていないことが影響しているのではないかと考える。

「I CAN (問題解決や信頼関係を構築する力) 要因」

協力者は、外国人教師と緊張せずに接すること 面白いことを言って 友達を笑わせること により、友人や他者の反応を読み取り、そして解釈して自己の行動的特徴を得意なこととして認識していたと考えられる。これらの行動は他者との信頼関係構築に有効な力であると考える。

自分の心を落ち着かせること 毎日薬を飲むこと は「自分の行動を管理することができる」に該当すると考えられ、協力者は、自分の苦手なことを物理的に、そして内面的に克服しようと努力していることが分かった。また、勉強 や 運動 などの苦手なことや お母さんのお手伝いをする こと など家族の役に立つといったことを頑張っており、これは「終了するまでタスクを続けることができる」に該当すると考えられた。協力者は、ASD の特性より他者の気持ちを読み取ることが苦手であるといわれているが、協力者なりに他者の反応をくみ取り、他者との関係構築へと努力をしていることが分かった。しかし、Grotberg の自己の緊張のコントロールについては抽出がされなかった。

「I HAVE (信頼関係やロールモデルの存在) 要因」

協力者には友達が 男女問わずたくさんいる 。これは広く浅い人間関係構築を示しているものと考えられる。しかし、【友達との関係性】では 自分の得意なことをほめてくれる関係もめごとのない関係 といったポジティブな関係構築が抽出された。これは、協力者において「安定した家族とコミュニティを持っていること」の表れであると考えられる。

協力者は、【困ったときの対処方法】として、自己解決の手段の中でも気持ちの切り替えを促す方法として 深呼吸する 好きなことをする どこか別の場所に行く を行動としてとっていた。また、無理に解決しようとするのではなく一時的な回避の行動として 寝る 我慢する、だれにも 相談しない といった行動をとっていた。これらは協力者のこれまでの経験値より獲得した対処方法であったと考えられる。レジリエンスと社会的スキルには高い関連があり、レジリエンスを高めるには社会的スキルを身に付けていく事が大切である⁸⁾。協力者は、どのようにしたら気持ちの切り替えや困難な場とどのように向き合うべきなのか経験より学ぶことはできていたが、どうしてそれが有効なのかといった意味付けまでは弱く、本能的に取っていた行動であったと考えられ、レジリエンスとしては低くはないが、未熟な状態であると考えられる。

協力者は 学校の先生や友達といった 誰かに相談する 行動を対処方法としてとっていた。これは相手に対し、この人ならどうにかしてくれるといった問題解決に関する信頼の感情を抱いていたからであると考えられる。これらは、Grotberg のコミュニケーションスキル、必要な時に他者に助けを求める力に該当すると考えられる。

また、【将来の夢】では、ロールモデルとなる家族の存在 ロールモデルとなる第3者の存在 といった「良いロールモデルを持っていること」が分かった。協力者の家庭内外において、目指すべき人物がいるということは、その人物に対して信頼やあこがれの感情を抱いているものと考えられる。これは「信頼できることが一人でもいる事」に該当し、協力者の周囲にはロールモデルとなりうる信頼できる他者が存在することを意味していると考えられる。しかし、

先に述べた【困ったときの対処方法】で信頼感情を抱いていた人物とは一致せず、協力者にとってその人物ごとに担う役割が異なっていることが分かった。

(7) レジリエンス全体の考察

協力者は、【困ったときの対処方法】として 戦いに行く といった直接困難なことに対峙しに行く行動をとっていた。しかし、その末路は協力者にとって納得のいく明るいものではないことが多かった。これはまだ「あなたの行動には限界がある事」が十分わかっておらず、感情の赴くままに衝動的に行動している結果であると考えられる。また、レジリエンスに対して攻撃性はマイナスの関係である⁸⁾。この衝動性の高さは、ASD の子どもの特性として頻度の多いもののひとつであり、彼らはこの特性とも十分に向き合っていく必要があり、レジリエンス向上は攻撃性を低めることにつながる⁸⁾。また、Grotberg の「必要な健康、教育、社会保障サービスにアクセスできること」においては、協力者は十分に実行できていなかった。小学校という限られたリソースの中でしかアクセスしておらず、今後ライフステージの変化に伴うコミュニティの拡大に合わせてリソースを増やしていくことがレジリエンスを向上させることに繋がっていくと考える。協力者は、自己の特性を理解している段階であり、その子どもなりの困難さを感じている状況であった。山本⁹⁾らは自己への意識は自己全体に対して向けられる評価と様々な側面から構成される自己像とに分けて整理することができると述べている。さまざまな側面で自己は構成されるといえる。つまり、ASD の子どもにおいては、この諸側面における自己認知の凸凹が生きづらさや困難感につながっていると考える。協力者においては、自己全体に対して向けられる評価については理解が進んでおり、他者との違いや自己の良い点にも十分気付きを得られており、情緒発達において年齢相当の発達過程にいることがわかった。その上で発達段階や発達特性を踏まえると、レジリエンスとしては比較的高い状況であり、年齢相応であったと考える。しかし、自己理解は進んでいるものの自己尊重においてはまだまだ発達途上であり、今後自己の内面や他者からの評価以外の自己像の認知などが課題である。それにより「I AM 要因」が深まり充実してくると考える。また、先に述べたように自己全体に対して向けられる評価を自己と捉えている段階であるため、「I CAN 要因」において、誰が見てもわかることが抽出されたと考える。協力者は経験からトライ アンド エラーで様々な対処方法を「I HAVE 要因」として獲得していたが、その理由や意味付けである、なぜうまくいったのか、なぜうまくいかなかったのかにおいては弱い状態であった。また、ソーシャルサポートや周囲のリソースの活用においては未熟な状態であり、レジリエンスとしては低い状況であったと考える。

(8) 臨床への示唆

体験を言語化する支援

自己理解が進むように、家族や学校関係者、そして医療従事者は、ASD の子どもの体験を言語化する機会を作り、言語化する支援を行う。自己の感情の変化や成長の記録を書字や言葉として記録または表出する習慣をつけることで、自己に対する多角的な理解が進むように支援する。

肯定的フィードバックによる成功体験の認知のための支援

ASD の子どもの得手不得手は、本人の気の持ちようでは変えられるものではない。そのため、ASD の子どもの体験を、支援者である家族、学校関係者、医療従事者は共有し、フィードバックを共にに行い、成功体験であることを認識でき、成功体験を積み重ねることで自信や意欲を持ち、レジリエンスが向上するように支援する。

参考文献

- 1) 宮本信也, 上手な付き合い方がわかる ASD の本, セレクト BOOKS, 2015
- 2) 杉山登志夫, 発達障害のいま, 講談社現代新書, 2011
- 3) 塩川宏郷 監修, 親子で乗り越える思春期の発達障害, 河出書房新社, 東京, 2016
- 4) 藤野博, レジリエンスを育てる本, 講談社, 2015
- 5) Grotberg, E, H, Resilience for today, prager publishers, 2003
- 6) 木谷秀勝, 中島俊思, 田中尚樹ほか, 青年期の自閉症スペクトラム障害を対象とした集中的「自己理解」プログラム, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 41; 63-70, 2016
- 7) 藤野博, 発達障害とレジリエンス, 臨床心理学, 金剛出版, 東京, 101 (17) 5; 613-617, 2017
- 8) 石田敦子, 村松常司, 服部祐児他, 小学生のレジリエンスに影響を与える要因に関する研究 生活習慣, 社会的スキル, 攻撃性, セルフエスティームに着目して, 東海学校保健研究, 42 (1), 29-39, 2018
- 9) 山本真理子, 松井豊, 山成由紀子, 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, 30 (1), 64-68, 1982

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|